

新・鬼師の世界

——周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」——

(株) 伊達屋—YUHIRO II. [I]

The New World of Ogre-tile Makers:

—Re-centering the Periphery: The Collection of “Kimetsu-no-yaiba” and “Onishi” —

Dateya. Inc.—YUHIRO II. [I]

高 原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: ttakashi@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

The article consists of two parts: one is in this 51st edition of Civilization 21, and the other will be in the next issue. In this issue, the author mainly focused on Yuhiro Date who is a female ogre-tile maker. As the world of ogre-tile makers is called “Onishi” (in Japan they are traditionally all men), the existence of Yuhiro itself means that, symbolically, the new world of ogre-tile makers has begun and that re-centering of their periphery has developed at the same time. Date is working at YUHIRO in a company entitled Dateya, Inc. In the same workshop, another female ogre-tile maker is her co-worker. The author has described what Yuhiro’s co-worker is like in the 68th edition of the Journal of Memoirs of the Community Research Institute of Aichi University. Therefore, this article and the former are counterparts respectively. Both articles will reveal the whole entirety of the female ogre-tile makers. In this article as part I, the author describes Yuhiro’s journey: to become an ogre-tile maker from her birth.

Yuhiro’s mother is from a famous family which owned a company of ogre-tiles called Onicho. Her parents started to run a new company of ogre-tiles when Yuhiro was only 10 years old. As a result, she started to help her parents part-time at a young age. Then, when she was 18, she decided to become an Onishi herself. In order to become an Onishi, she had three masters to deal with. The first one was Renichi Kamiya at the age of 18; the second was Tomoaki Ishikawa when she was 20; and the third,

Hideki Ito when she was 21. The relationship between her masters and herself has continued until today.

(株)伊達屋—YUHIRO II.を描いて行く。YUHIRO I. (高原 2023) で、女性の鬼師である伊達映見、伊達由尋、母娘が運営する手作り鬼瓦工房、YUHIRO について紹介した。(高原 2023) その際に述べた YUHIRO の特徴は二人の女鬼師が、二人三脚でもって YUHIRO を運営しながら、鬼瓦などの製品を制作している事にそのユニークさがあることを説明した。しかし、YUHIRO I. では映見と由尋を取り上げてはいるものの、主な語り手は母である映見であった。そこで、YUHIRO II. では攻守所を変えるような形をとって、主な語り手を娘の由尋にし、文章上においても、二人三脚の形にし、YUHIRO I. と YUHIRO II. を合わせて、一つの YUHIRO に統合したい。読者は、YUHIRO I. と YUHIRO II. を読むことによって、「YUHIRO」がより立体的に立ち上がり、新しいタイプの鬼板屋の出現に気づくことになるだろう。文字通り、「新・鬼師の世界」が登場したのである。ここでは、なぜ「鬼師の世界」に「新」が付くのかの意味を多角的に検討、考察を加えてみたい。

鬼師への道程 I ^{みちのり}

由尋は平成 5 年 (1993) 12 月 7 日大阪で生まれている。苗字の「伊達」が示しているように伊達は日本ではそれほど拡がりを持つ苗字ではない。しかし、広がりには狭い割に、なぜか人々によく知られている苗字である。日本には大きくは二つの伊達があり、一つが仙台の伊達であり、もう一つが伊予宇和島の伊達である。ただ後者は仙台の伊達一族の一党という繋がりを持ち、両者は大きな意味で伊達一族という事になる。

なぜ行き成り苗字である伊達の話をしたかと言うと、私自身は特に伊達家とは縁もゆかりもない者にもかかわらず、意外にも「伊達」の名前から連想されるものが仙台であり、伊予宇和島である事への不思議さであった。何らかの過程で、知識として入って来た「伊達」ではあるが、「伊達」の名前は小説やメディアなどを通じて、広く知られている名前であるのは事実である。それ故に、インタビューをした際に、苗字が「伊達」で、さらに会社名も「(株)伊達屋」としているので、母親である映見の主人で、娘である由尋の父親、利之の家系に何か鬼瓦に関連する特徴があるのかと思い、伊達家の名前について尋ねてみた。映見はそれについて次のように話してくれた。

おじいちゃんが、東北の方の出身なんで、茨城県なんですけど、ま、伊達っていう苗字でもわかるように、そちらの方の。もともとはもっと上の宮城の方から流れて来たと思うんですけど。

伊達姓は多いのかどうかと続けて聴いてみた。

いないですね。少ないですね。全国的に見ても、多分すごく少ないと思います。ま、うち、家紋がこちらの方に飾ってあるんですけど、仙台笹、伊達政宗さんと同じ型なもんですから、はい。

あの、はっきりした家系図があるわけではないんですけど、おじいちゃんが向こうからの流れだし、家紋が、あの、家紋っていう事は、それに関係する親戚とか、何かあったのかなとは思いますが……。

やっぱり、家紋というものは代々受け継がれるものなので、「やっぱり、じゃ、僕これ使いたい」って、簡単に使える家系の家紋ではないと思うんで、何かあったのかなと思うんですけど、……。おじいちゃんは「俺は知らん」っていう。(笑)

因みに、祖父の好弘は松下の(株)パナソニックに勤めていたという。主人の利之は大阪のトッパン・ホームズ(株)という会社の工場へ勤務していた。映見は愛知県高浜市から大阪に住む主人のもとに嫁いだのだ。

一方の映見は(株)鬼長の出で、浅井邦彦と浅井頼代の娘(次女)であり、初代浅井長之助は曾祖父に当たる。つまり、映見は鬼師の家系に生まれ育っている。しかも、映見の母親である頼代は石川家の出であり、頼代の父、石川英雄は石英赤瓦(現在の(株)石英)を経営していた(高原 2017)。映見は何と、父、母共に鬼・瓦関係の仕事を持つ家系の出なのである。さらに父親である邦彦の妹、歳子が石英工業(当時)の石川定次(現(株)石英の会長)のもとに嫁いでいる(高原 2017)。この様に(株)鬼長と(株)石英は互いに強い血族関係を結んでいた。こうした背景を持つ映見が伊達家へ嫁いだことになる。

映見の娘、由尋が大阪から高浜へと居を移すに至った頃の幼い記憶を次のように語っている。

そうですね、家としては普通にサラリーマンの^{うち}家なので、何の変哲もない感じではあったんですけど、ま、途中から、こちらの高浜の方に来て……。

こちらに来たのが、私が小学校三年生ぐらい。二年生の夏休みぐらいだったっけ。それから、母は、お父さんは、お母さんのお姉さんがやってる鬼長に入って仕事をしました。……というところから鬼瓦にちょっとずつ携わるようになっていったと思うんですけど。

この様に、由尋が小学二、三年生の頃、つまり2003年頃に突然のように由尋の人生が、そして、伊達家の生活が一変するのである。普通のサラリーマン生活を離れて、映見の親元である鬼長へ戻り、伊達夫婦は鬼長で働き始めたのだ。その頃のことを映見は語っている。

私の実家の方が、一時ちょっと調子が悪くなった時がありまして、その時に、こちらの親戚の方から、ま、あの、家、姉が後継ぎではあったんですけど、鬼長側の。だけど、ちょっと調子が悪くなった時に、親戚が、「こんな時に助けが出来るのは姉妹であるお前しかない」と言われて、大阪の方から、こちらの方に引っ越して来て、呼ばれて、こちらで仕事を始めました。

このころ、実際に、鬼長では、深刻な経営者問題が起こっており、第五代鬼長から第六代鬼長へと切り替わり、映見の母親である浅井頼代（元第四代鬼長）が再び鬼長の経営を託されている（高原 2017）。頼代の背後のサポートに就いたのが実家であった石英工業の石川定次であり、大でんちこ鬼瓦の神谷保男であった。大でんちこ鬼瓦には定次の姉の等子が嫁いでおり、同じく姉の頼代が鬼長に嫁いでいたことになり、鬼長の経営危機の非常事態に頼代の直接の兄弟が結集・結束したのであった。そしてその余波が石川一族の一人として、映見に波及して来たことになる。正に、非常事態宣言であった。映見は次のように言う。

石川さんとか、でんちこさんとかの叔父さんとかに、「この、自分の方の会社（鬼長）が調子が悪い時に、姉妹なんだからお前が助けに来なきゃいけないよ」という風に言われて、こっちへ来ることになる……。

2001年9月11日にはアメリカ合衆国で、同時多発テロが起きている。それと似たような事件が似たような時機に、規模は比較にならないが、高浜市にある（株）鬼長で発生し、鬼長は一時、経営上の危機に陥ったのである（高原 2017: 283-290）。結果として、鬼長は経営的には生き延びたものの、鬼長から伝統的な手作り部門が消えて行き、本来の鬼長の姿を見ることは無くなった。

ところが、この鬼長の存亡の危機が逆に不死鳥的な動きを起こしたのである。手作り部門の切り離しが進んだ鬼長は、第七代鬼長、浅井和美へと引き継がれたが、切り離された手作り部門、つまり鬼長の手作りの伝統は一介の伊達家の主婦となっていた伊達映見（浅井和美の妹）へ奇跡的に託されることになるのである。もちろん、この時は映見自身も、他の誰もその事を知る由もなかった。

大阪を出て、高浜の鬼長で働き始めた伊達夫婦は由尋が小学四年生になったころ（2004年）、鬼長を再び去り、再度、人生の岐路に立つことになる。そして立ち上げたのがトラスト・Date という主に鬼瓦と瓦の道具物を作るプレス工場であった。立ち上げ当初は鬼瓦のプレスの白地を生産する工場だったという。もちろん鬼長での経験が生きているのは言うまでもないが、ここでも、大阪から鬼長へと引き寄せた叔父の石川定次の後押しがあった。

（鬼長を）「やめようか」って思った時に、一度、「大阪へ帰ろうかな」という話もあったんですよ。だけど、こうやって石川さん（石川定次）が声を掛けてくれたりだとか、ま、私のプライドではないですけど、やっぱり、あの、「こちらでやった」って実績があるにしても、向こうへ帰ったらゼロじゃないですか。

やっぱり、こちらで主人が……。 「一旗揚げさせたい」って言うんですかね。「ああ、こっちへ来て良かった」とか。「ああっ、社長になった」っていう、そういう何か喜びを与えてあげたいと思って……。 「会社をやれ」って言うけど「どうする」という時に、「やろう」って、……二人で始めました。

最初のうちは本当に朝から晩まで、下手すると夜中まで仕事していました。だから娘とかも、ちょうど小学生四年生ぐらいで仕事始めたのかな。四年生か五年生ぐらいの時に始めたんですけど、私たちが夜、ご飯食べさせてまた仕事に行ってしまうんで……。

そうすると、娘が息子のことをお風呂に入れてくれたりだとか、あと、お布団敷^ひいてくれたりだとか。布団のところで毎日本を読んでもらうて。

そうすると、家へ帰るじゃないですか。12時ごろまで仕事をしてたんですよ。で、帰ると、お布団が敷いてあって、お布団の周りに本がすごく散らばって、二人が寝ている姿を見ては泣いてました。

そして、10年後の平成26年（2014）にはトラスト・Date から株式会社伊達屋へと法人化し、社名変更をしたのである。

鬼師への道程 II

I では普通のサラリーマン家族が人生の縁^{えにし}によって、「鬼師の世界」へ足を踏み入れる様を描いた。通常ではまず有り得ない出来事であり、まるでよく出来た劇を舞台の上に見ているような感じがする。ここからは由尋の話へと移ることになる。今だから言えるが、それは大局から見ると本来の鬼長が、つまり初代浅井長之助の縁の系が「鬼長の危機」に際して発動したように見える。両親が鬼長と関わるようになって、由尋も鬼瓦と関わるようになっていったのである。この事は由尋自身も自覚しており、両親の鬼長での仕事により、「鬼瓦にちょっとずつ携わるようになっていった」と述べている。そしてさらに踏み込んで、由尋は次のように話している。

でも、一番、鬼瓦とかに携わるようになったのは、中学校の時、中学生の二年生に、この辺の地域の職業体験で、たまたま行く当てもなく（笑）、なんかちょっと変わった職業を私もしたかったので、せっかく行くんだったら、皆が行くお花屋さんとか、ケーキ屋さんじゃなくて、誰も行かないような所へ行きたいと思っていたところ、ま、行く当てがなかったので、最終的にうちの会社（トラスト・Date）に三日間ぐらい職業体験で勉強して……。

中学二年生（13歳頃）の地域の職業体験が直接の切っ掛けとなり、由尋は鬼師の世界の門を自ら敲いたのだ。その時、地域の職業を選ぶにあたって、「変わった職業」、「誰も行かないようなところ」へ行きたいと考えている。しかし、それが何かがすぐには思い浮かばず、行き着いた先がトラスト・Date だったのだ。縁の糸（意図）が働いているとしか思えない成り行きである。何かに導かれているとも言えよう。地域の職業で、変わった職業で、誰も行かないようなところが、「鬼師の世界」だったのだ。由尋の場合、職業体験学習が、三日坊主で終わらなかったことが事の始まりであった。

そのあとは、夏休みのお手伝いとかで、ちょこちょこ来てて、それも家はお小遣い制ではないので、自分でお仕事の手伝いとか、家事のお手伝いとかしないと、お小遣いが貰えなかったのも、自分としてはやりたくて、お仕事をしたくてやってたというよりは、自分のお小遣い稼ごってというのが一番最初の切っ掛けです。

実際にどういった仕事をしていたのかも由尋は語ってくれた。トラスト・Date での作業の一端を知ることができる。（図1）

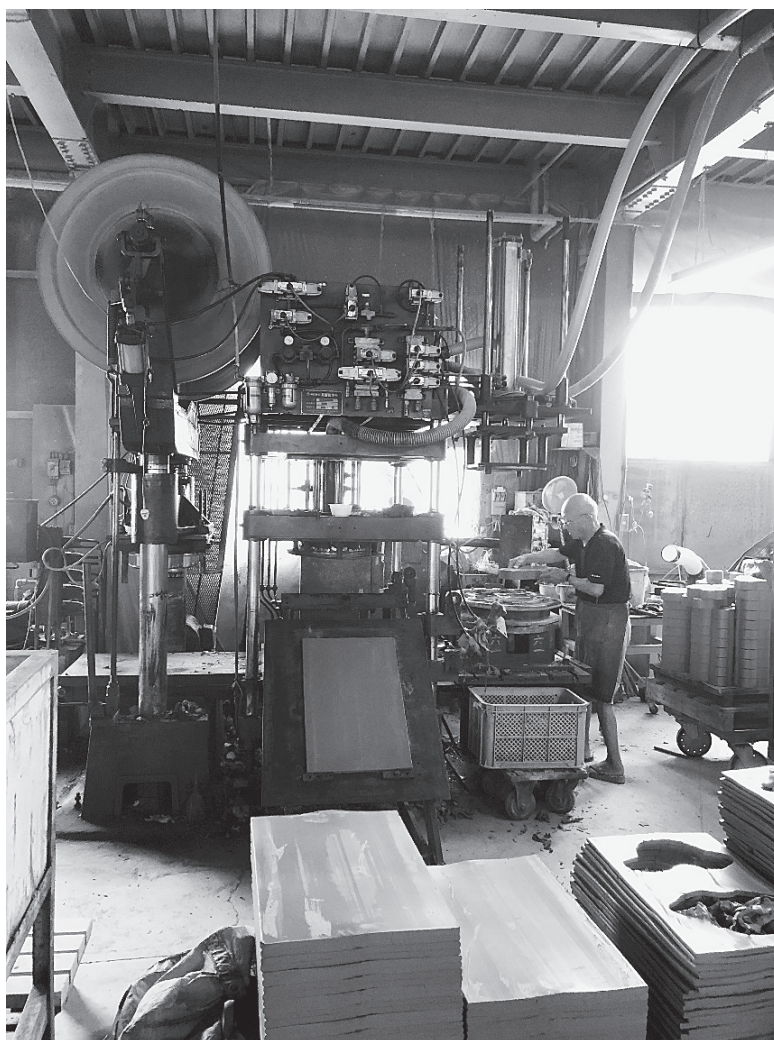


図1 トラスト・Date 工場内：作業中の神谷鍊一（右中央）

そうですね、白地室で検品して、白地をパレットに積むっていう事ですか……。あと、裏を切るという作業で、鬼瓦の箱型の形を作るのに、裏がない状態で機械でスッとして出て来るので、その裏を張るための、裏の形の粘土を切る作業をしたりですか、あとは、仕上げもちょっとやりました。

当時、13歳の由尋がこういった作業をトラスト・Date で徐々に行うようになっていったのである。そして、このお小遣い稼ぎで始めた仕事が、何と高校卒業まで毎日とは言わずとも、途切れずに続けたことになる。ある意味、鬼師となるべく、下積み生活を本人の意識や意図は別として、約5年間したのだ。そして、そうした由尋に就職という人生の岐

路が来る。由尋が選んだ職が、トラスト・Dateでの仕事であり、それが由尋を近い将来、鬼師の世界へと続く道程の一里塚だったのである。由尋はその辺りの事を次のように語っている。

そのあとは、そうですね、ちょこちょこお手伝いしながら、ずっと高校卒業まで来て。……で、私は4歳ぐらいの頃からバレエを習ってたんですけど、その「バレエを続けて行きたい」という思いもあって、普通の就職先じゃなくって、何か、ある程度、融通の付くところっていうので、私はここに（トラスト・Date）入ったんですけど。

ま、あの、父と、母としては、私が昔から手伝っていたので、ある程度、もう、教えなくても仕事ができる都合の良い人っていう形で、お互いの、その、利益が一致したと言いますか、(笑) ……で、入れてもらって。

由尋は18歳、高校卒業を期にトラスト・Dateに入ることになったが、トラスト・Date時代をはさんで前後、鬼師とは一見、繋がらないような活動をしている。一つが4歳から始めたクラシックバレエである。トラスト・Dateに入った理由の一つがこのバレエが続けられる環境であることであった。さらに、トラスト・Dateに入社して、新しく始めた事が、地域のアイドルであった。舞台上で踊るバレエはアイドルとして活動するには最高の素養でもある。由尋はこの件について簡単に述べている。

趣味のクラシックバレエを週、何回行ってたかなあ？ 4回？ 毎日のようにバレエをしながら、お仕事もしてっていう事で、生活させてもらってて。

で、途中で、地域のアイドルとかもしたんですけど……。

同じような事を「みほとけ」というタレント・芸人が「みほとけちゃんねる」というYouTubeで「元アイドルが「鬼師」になったワケ」というタイトルで、由尋にインタビューしている。(https://www.youtube.com/watch?v=mB7VeofdT00)

ゆひろ： で、その時は、クラシック・バレエを私ずっとやってたので。

みほとけ： そうか、バレエもやってたんですねえ。

ゆひろ： そうですねえ。

みほとけ： だから、アイドルで、こう、歌ったり、踊ったりとかも出来たというか。

ゆひろ： そう、舞台に立って、表現するのが好きだったので、それで、まあ、アイドルも、同じような感じで、人に元気を与えられるっていうのが、すごく魅力だになっていう事で、やらせてもらったんですけど。やってみたら逆に、こう、細かく、自分一人で、黙々とやる仕事の方が合う、あの、合うっていう……。自分の作品を生み出して、こう、作ってできるようにするという事はうちでは学べないので、まあ、職人として、外に修業に出してもらって……。

具体的なアイドル活動についても、このインタビューで語っている。

ゆひろ： 最初のアイドルの方は、ボランティアだったので、その、休日にどこかに、こう、イベントごとをやりに行くだとか、まあ、ボランティアするって事が多かったんで、まあ、その仕事と両立してる人か、あと、まあ、学生さんとかが多くてえ……。なので、本当に、皆さん、自分の、本当のやることがありながらの、アイドル活動ってぐらいでしたね。

みほとけ： ふーん。おもしろいですねえ。ご当地アイドルみたいな感じですね。

ゆひろ： そうですね。いや、でも、何か、いいなあ。明るくて、元気もらえるなあって思いました。(笑)

この話を聞くと、アイドルとして、外交的で、社交的なイメージを由尋に対して持つかも知れないが、インタビューで本人が述べているように、「やってみたら、逆に、こう、細かく、自分一人で、黙々とやる仕事の方が合う……」人間であることに気づくのである。面白いのは、すでにその傾向が、トラスト・Dateに入る前に現れていたことだ。由尋はみほとけとのインタビューで、その事にも言及している。

みほとけ： えー、でもかっこいい。私てっきりー、これだけのものが作れるから、美大なんて出てるのかなあって思ったんですよ。だから、彫刻家とか、そういう訳じゃないんですよ。

ゆひろ： じゃないですね。ふつうに、あの一、高校は裁縫と調理の学校（愛知県立大府高等学校）だったので、全然、違うところから来てえ……。まあ、でも、その、コツコツやるっていうのは、進んだんですけどおー。で、裁縫とかも、コツコツ自分で縫ってえ、作品を作り上げていくって感じなので、そこで、こう、(鬼師の仕事と) 似てたのかあっと、ちょっと思います。

この様にして、由尋はまた一步、鬼師の世界へ踏み出して行ったことになる。一見、ま

るで違う道に入ったような選択が大きく迂回しながら鬼師の世界へと誘っていることがわかる。まるで、緑の糸に惹かれるかのように由尋は鬼師の世界へさらに歩を進めたのである。そして、由尋は二十歳^{はたち}になった時に、自ら、自分の意志で、鬼師を目指す決意をする。

結局、最終的には、やって行く中で、粘土で作ることに対しての楽しみが生まれたりとか、もっと自分がそこを突き詰めて行きたいという気持ちが生まれて行って……。

丁度、20歳の時に見た、飾り瓦コンクールで、石川智昭さんの作品を見て、「私もこんなきれいに作りたい」って思ったのと、いま、(かわら)美術館で、常設展示とかされてると思うんですけど、浅井長之助さんの作った鶴の鬼瓦と、亀の鬼瓦とか、あと、透かしの付いた菊の鬼瓦を見た時に、「鬼師になったら、こういう風に作れる技術とか学べるんだ」って思って……。 (図2、図3)

今までだと、機械で出来たものをただ同じ様に作業するだけだったんですけど、「自分で作る楽しみ」っていうのを、鬼師にならないと味わえないんだとか……。 「新しい商品を作って、これから瓦業界、発展して行く」っていうのも、鬼師にならないと難しいのかなっという事で、石川さんとこへ修業に出させてもらって勉強しました。

(株) 石英の石川智昭は由尋からすると、母、映見のいここに当たる人である。しかも、通常のいとは違い、浅井家(鬼長)の嫁(頼代; 映見の母)が石川家(石英)から来ており、石川家の嫁(歳子; 智昭の母)が浅井家から来ているのである。つまり二重いところで、通常のいところよりも二倍血が濃い関係を形成している。そして、双方が鬼・瓦屋なのである。そういった石川智昭は由尋が小さい頃から可愛がられていた「叔父さん」であつたと思うが、飾り瓦コンクールの智昭の鬼瓦を由尋は見て、事態が急転したのである。

(石英へ) 行き始めた切っ掛けとかで言いますと、その二十歳の飾り瓦コンクールで見た作品で、「スゴいな」って思った時に、親戚の叔父さんなので、やっぱり、知らないところへ行くよりは話をしやすいというのと、ある程度、そこで母にサポートしてもらえるっていうのもあって、私はあの人みたいにきれいな商品が作りたいんだけど、何とか話を通してもらえないかっていう事で、母からも言ってもらえましたし、私としても、他の鬼師さんじゃなくて、「石川さんとこで学びたい」ってことで、行かせてもらいました。

由尋が持っていた「叔父さん」のイメージが飾り瓦コンクールの智昭の作った鬼瓦を見



図2 鶴文鬼瓦 浅井長之助作 昭和5年(1930)



図3 亀文鬼瓦 浅井長之助作 年代不詳

て、一驚し、別人の「叔父さん」の姿に変貌したのだ。由尋はそこに「鬼師」の姿を初めて意識したことになる。

鬼師への道程 III

二十歳を境に由尋の石川智昭のもとでの修業が始まる。その様子を由尋は話してくれた。智昭の仕事場へ通うようになって分かったことは、由尋は全くのずぶの素人ではなかったという事だった。13歳から始まったトラスト・Dateでのプレス機械による鬼瓦や瓦の道具物の作業に二十歳まで従事した経験が縁の糸に導かれるように血肉となっていたのである。由尋はその最初の日の事を語るのであった。

仕事しているところが邪魔にならないように、ちょっとだけ横に台を作ってもらって、そこでお仕事させてもらいました。

初っ端、向こうに行って、まず最初、「道具使ってみて」って言われた時に、私、先に、今の会社で、84歳、85歳になったのかな……、おじいさんにずっと一緒に仕事をしているパートナーだったんですけど、その人に道具の使い方をもうずっと高校卒業してから一緒に仕事してたので、その頃から習ってたので、ある程度の……、そうですね、一番最初の師匠ってなるんですけど……（図4）。

その最初の由尋の師匠は、智昭ではなく、18歳で入社してから、トラスト・Dateと一緒に仕事をしており、名前を神谷鍊一という人であった。由尋は智昭の前で、ある意味、実技試験を一对一で受けたことになる。智昭からすれば、教えるにあたって、由尋の現状を把握する必要があった。智昭は由尋を次のように見たのである。由尋がその智昭の言葉を語ってくれた。

向こうに行った最初の日に、「もう、基礎が出来てるから、だから、応用みたいなことを教えて行けば、ある程度出来ちゃうと思うよ」という風に、一番最初にもう言われました。

智昭は由尋の道具を扱う手つきや様子を見て、直ぐに由尋の実力を判定したことになる。

今までだと、普通に教えてくれる人たちだと、全然籠の使い方とか、道具の使い方かわからないですし、何も出来ないところから始まるんで、「見て覚えなさい」とか、



図4 制作中の神谷鎌一（手前）と伊達由尋（奥）：トラスト・Date 工場内

まあ、ある程度やって行く中で、「修業の期間が長くないといけない」って言われたんですけど、その今まで皆さんが学んで来るところを先にやってるから、そのあと、ちょこっと応用を勉強するだけなんで、「短い期間で済んだ」って言われてます。

由尋は最初の面接的なテストを無事通過すると、いよいよ実際の修業へと入って行った。その一端をここに紹介していく。いわゆる伝統の技がいかに伝えられていくかの事例を垣間見ることが出来る。

一番最初は簡単な装飾の無いような鬼瓦を作ったりというところで、まず型のもの

は、こちらで勉強してなかったなので、型に粘土を詰めて、鬼瓦を作るという作業を教えてもらって……。それも装飾がないものなので、型から出した時に、仕上げをする時にも、し易い様にといい事で、その、装飾が無かったんですけど、それも、箆の使い方とかも、今までプレスのもので使ってた箆の使い方と、やっぱり力加減が違ってたりとか……。色むらが出ちゃうというのがあるんで。方向が違うとか、細かい事を教えてもらって……。

そのあとに、立浪巴という波の形の装飾がある形なんですけど、それをやることによって、細かい箆の使い方が、もっと大まかに撫でるだけじゃなくって、シビ（鬼瓦の雲や波の部分を浮き立たせるために箆で筋彫りすること）の部分をもっと綺麗に仕上げる時に、こういう風に箆を当てなきゃいけないとか……。それが、うまく細かい道具で、竹の筒状のもので、波をポンポンとこう押していく時に、「自分たちの感性で押して行かなきゃいけない」と言われて、それも何個か作ることで、指導してもらいました。

由尋は石英で智昭に付いて修業を続けて行った。そのやり方は午前中、(株)伊達屋で仕事をして、午後、石英へ出かけて行ったのである。それを約一年半ほどしたことになる。由尋はやがて自ら作りたい鬼瓦を持って行って指導を受けるようになる(図5)。

やっぱり細かいところまで仕上げをする技術っていうのが、伸びてるなあとわかりました。なので、向こうで修業してる時は、鬼瓦、手作りで作る鬼瓦の仕上げだとか、自分で作りたいものをこういう風に、作りたいんですというものを教えてもらうっていうのもあったので、いろいろ持ってたたりして、教えていただきました。

やがて、その修業の成果が実感を伴う、違いとなって由尋自身に現れ始めて行くのである。

向こう行って、帰って来て、こっちでもう一回プレスなどの仕上げ作業をした時に、手作りで作ったものは、この傷直さなきゃ、あの傷直さなきゃというのがすごい有るので、そこでちょっと戸惑いがあったりとか。(笑)

やっぱり、自分で成形した時に、スピードとかも、向こうで教わったことによって、角度が覚えられてるとか、きれいに早く仕上げる技っていうものを勉強できたので、全然できたものの、綺麗さの違いというのが有ったりして、自分でもそれを見ながら

実感できました。

修業に励んでいた由尋に対して、意外にも一年半ほど経ったあたりで、智昭は修業の終了宣言をするのである。特に何か終了検定とか、終了作品の制作とかは無かったのである。

作品をいくつか作って行く中で、型に込める技術というのは自分である程度感覚というのもあるので、その基礎的な事として、例えば真ん中から粘土入れなきゃいけないよとか、これだけ奥までちゃんと押し込まないと粘土が出ないんだよという細かいことは教えられるけど、それ以外は自分の感覚で学びなさいとなるので、ここに修業に毎日来て教えてあげても、そこは自分で勉強していくしかないから、ここではこれ以上教えられないというのがあったので、「もう、これで良いよ」って言われました。

その、もう、基礎は教えれたから、あとは応用をここで教えるのも、時間の無駄だから、それをやるぐらいだったら、「自分の作品を沢山作りなさい」って言われました。



図5 指導中の石川智昭（右）と修業中の伊達由尋（左）：（株）石英にて

これを機に、由尋は実際に智昭のもとに通う事をやめるのである。第二の師匠のもとでの修業が終わったのである。由尋はこの事について次のように語っている。

基本的にはここで自分で学んだことで、よっぽど応用が利くので、その中でやっていて全然わからないとか、すごい困ったっていう事になると、行くぐらいで、今では(2021年現在)もうほとんど行かないですね(図6)。

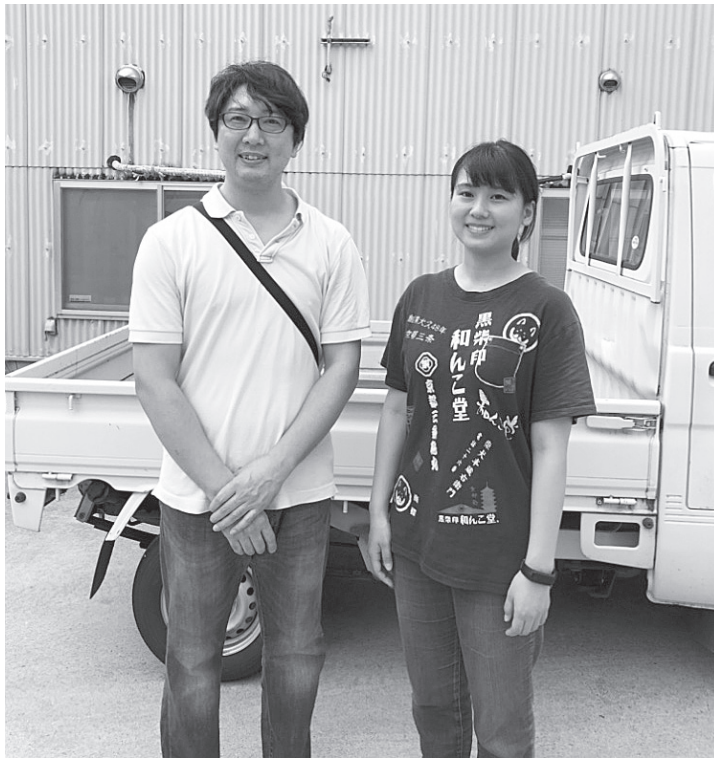


図6 師弟：石川智昭(左)と伊達由尋(右) 石英工場にて

鬼師への道程 IV

智昭のもとを離れた由尋はずっとその後、一人でいたわけではなかった。さらに鬼師の世界を広げて行っている。つまり智昭を師とする修業時代が完了すると、誰か他の師匠が現れたのかなと思い、尋ねてみたのだ。由尋は次のように答えている。

他の鬼師さんですと、私は師匠が三人いるので……。一番最初に、道具の師匠がいて、石川智昭さんがいて、で、その次は伊藤さんっていう、伊藤鬼瓦店さんっていうと



図7 鬼瓦制作中の伊藤秀樹 伊藤鬼瓦店工場内

ころの鬼師さんがいるんですけど……。

その人はお父さんの釣り仲間で（笑）、そこはお寺とかに載せる経の巻をほぼ専門に作っているところなので……。名前は伊藤秀樹さん。で、おじいちゃんが腕のいい鬼師さんで、その方も鬼師さんやってみえますし、弟さんもやってみえます。

そこで、伊藤さん（秀樹）にも教えてもらいながら、おじいちゃんもよく私の横に来て、見ながら教えてくれたので、はい。その方もすごい、元々は厳しい方なんですけど、やっぱり残して行かなきゃいけないというのがあるから、「しっかり教えます」という事で、よく見てもらって、よく仲良くさせてもらってます（笑）。

ここに出て来る伊藤秀樹は伊藤鬼瓦店の現親方である。「おじいちゃん」に当たるのが伊藤正男で、秀樹の元親方であり、父でもある。つまり秀樹は伊藤鬼瓦店二代目であり、

伊藤鬼瓦店については既に詳しく『鬼師の世界』（高原 2017: 526-546）に述べている。伊藤鬼瓦店は元をただと、鬼板屋の鬼金へ繋がって来る。伊藤鬼瓦店は鬼長と同じ町内で、鬼長の工場が見えるが、特に鬼師の関係で鬼長との繋がりはない。由尋は伊藤鬼瓦店の秀樹が、父、利之の釣り仲間という関係で紹介され、由尋が21歳位の頃から鬼瓦を習うようになったという。実際に伊藤鬼瓦店の仕事場で、秀樹や正男からも学んだのだ。主に教えてもらったのは経の巻の型起こしと仕上げの仕方であった（図7）。

由尋の三人の師匠、神谷鍊一、石川智昭、伊藤秀樹を超えると、残る三州鬼師の世界は由尋にとって鬼瓦の技術・知識を学ぶ場という事になる。由尋は当然、その事は認識しており、次のように語っている。

そのあとは、もう、灯籠づくりとかの講師とかに行った時に、他の鬼師さんたちと一緒に講師とかするので、その中で、今、こういう仕事をしてて困ってるんですけど、道具をどういう風に使ったらいいですかとか、どういう道具を使うのが適正なんですかっていった事を聞くと、その時に鬼師さんのおじさんたちが教えてくれたりだとか、何だかのイベントがあると、鬼師さんたち、いろいろ集まるイベント事が多いので、その中で訊いて行くと……。

こういった鬼師の集いの母体^{つど}が鬼瓦組合という事になる。由尋は組合に23歳で鬼瓦技能試験を受ける時に入ったのである。20歳で智昭に師事し、一年半ほど石英で修業をし、23歳の技能試験へと至ったことになる。この鬼瓦組合の加入が文字通りの鬼師の世界への正式参入という事になる。映見が組合加入について話してくれた。

特に組合に入る必要性はずっと無かったんですよ。組合さんってのは、結局、仕事をどこからか依頼されて来て、それを皆に発信してくれるところがあるんですが、うちは注文して来るところ、決まってたんで、特に組合さんに入ることも無く……。

だけど、この娘（由尋）が、鬼瓦認定検定試験を受ける時に、「組合入ってないと試験受けない」と言われて、それが切っ掛けで組合には入ったんですけど……。

でも、組合さんには組合さんの良さがあって、ま、「鬼滅の刃」も、組合さんからお話を頂いたり……。それと何かあると、仕事を分担してくれるという点ではとても良かった。入って良かったんじゃないかなと思う。

この組合加入によって、「鬼師の世界」の住民となり、由尋は正式に鬼師になったと言える。その様を由尋は語っている。

集まりとかがあって、組合の一員で参加しなきゃいけないとか、「何かしませんか」という話がよく来るようになるので、それで、鬼師さんたちの繋がりがどんどんできて行ったので。

みんな、何か親戚の叔父さんみたいな感じで、すごい良くしてくれるので……。やはり年齢がすごい離れていて、ライバルっていうよりかは、新しい世代の人っていう感じで、皆さん接してくれるので。

ただね、いろいろ、すごい、私としても皆さんすごい大先輩なので、何かするにしても、私がたくさん動かなきゃという気持ちで動くと、「すごい良く働いてくれるね。ありがとう」って、ま、あの、お茶とかくれたりとか（笑）、ジュース買ってもらったりとか……。

本当に周りの親戚の叔父ちゃんとか、年齢近いんだと、歳の離れたお兄ちゃんみたいな感じで、すごい何か、大家族みたいな感じで接してくれます。

そういった中で、元アイドルで、若い女性の鬼師という事で、ある意味、目立つ存在に由尋はなって行った。それがメディアへの頻繁な登場へと繋がって行く。由尋は初めてのメディア出演について語ってくれた。

最初は、一番最初に出たのは、多分、「ゴリ霧中」（中京テレビ制作の旅番組）さんかなとは思うんですけど。（2014年8月）たまたま、灯籠づくりの、小学生に教える時があって、鬼みち祭りの灯籠をつくる会か何かで、学校に教えに行ってたところに、ゴリ霧中さんが来て、で、何かいろいろインタビューをしてて、そんな時にあんまり目立ちたくなかったんで、後ろの方で隠れながら小学生に混じりながらやってたんです。そこで、鬼師のおじさんが、「珍しい娘がいるよー」って話になって、捕まってしまったという感じです（笑）。

一番は緊張するんで（笑）、大変だなというのと、あんまり難しい事はそんな時は聞かれなかったんで、そんなに大変というよりかは、一番は緊張と「大丈夫かな」という心配がありました。

ちゃんとした鬼師さんたちが答えるというのだと安心できるんですけど、「私なんかいろいろ答えても大丈夫なのかな」っていう思いがありました。

そのあとはちょこちょこ続いている感じなので、あとは、鬼滅の刃のコラボの事は、メディアに出た時は、すごい、いろんなところからお話が来たという事はあったんですけど、……。

由尋は鬼瓦組合に入って、急速に鬼師の世界に溶け込んでいった。男性が中心で、由尋からするとやや年齢の行った、鬼師として大先輩、ベテランクラスが多い職人の中に、若い、女性の鬼師が現れたので、鬼師の中で目立つ存在となり、メディア受けするようになったのは事実である。しかし、それは由尋が組合の中で浮き上がった存在になったというよりも、反対に、将来を担う希望の星のような、組合員からの力強い受け入れの姿勢に支えられている。鬼師の伝統を受け継ぎ、その伝統を共有するメンバーとしての由尋へと成長しているのだ。新しい伝統の継承の仕方が生まれていると言える。「新・鬼師の世界」が鬼瓦組合に出来上がっているのだ。由尋の母親である映見が、まさに、新・旧の「鬼師の世界」について言及している。映見の新・旧の比較はある意味、象徴的に現在における鬼師の世界の変容を表していると言える。

この業界、親戚ものすごく多いです、先程みたいに、友達とかも多いんで、すごく助け合いつてのはものすごくしていると思います。

だから、その中で、全然、親戚でも関係ない人でも、鬼師さんたちが、娘に、「わかんない事が有ったら来なよ、工場へ」。「いつでも来ていいんだよ」っとか、そういう風な態度で、そうやって接してくれるというのは、そうしたところなのかなと思います。素極皆さん、優しいね。

この言葉のすぐ後に、「旧・鬼師の世界」が語られる。「新・鬼師の世界」のみを聞くと、別に、特に、違和感は感じないが、「旧・鬼師の世界」は実は真逆の事が普通だったのである。映見の言葉を聞こう。

昔だと、それこそ、遊びに行くじゃないですか。鬼師さんのところへ。そうすると、「自分が、今、どんな事やってるっていう事も、やっぱり、人に知られたくない」とか、「技術も見せたくない」って感じで……。

もう、直ぐ、手を止めて、やっているその仕事の手を止めて、やっている仕事のものを、毛布とか、布を被せて、隠して、もう、人に見せないんですよ。それが昔のやり方でしたね。

だから、ま、親戚の家だったら大丈夫なんですけど、ま、お爺さんの関係の鬼師さんのとことか行ったりすると、スッと、仕事止めちゃうんですよ。「あっ、いい、休憩、休憩」とか言って。「ああ、やっててもいいよ」って言っても、絶対に見せないですね。それが技術の伝承っていうんですかね。

つまり、当時と比べると、現在の技術の伝承の仕方がほぼ180度、反転しているのである。映見は次のように話す。

それが、今では、そういう感じではないです。「みんなで、この業界、皆で、若者育てよう！」みたいな感じじゃないかなと思います。

「鬼滅の刃」とのコラボ I

鬼師となった由尋が最初に出会った大きなイベントが2020年10月30日から始まった「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションであった。3か月間にわたる期間限定のアニメ産業とのコラボである。異業種とのコラボレーションであり、鬼瓦組合としても初めてのイベントであった。しかも、単なる二業者間のコラボではなく、高浜市制50周年記念を祝う市の主な行事の一つとして組み込まれていた。公的機関である愛知県高浜市が全面的に支援を行った特殊なイベントであった。このイベントをさらに特異なものにしたのが、新型コロナ禍の中、日本政府が出す緊急事態宣言の間隙を縫って行われたことである。しかし、コロナ禍であることには変わりなく、人々の行動に強い制約が伴う環境下でのイベントであった。

由尋の「鬼滅の刃とのコラボ」の話は名鉄三河高浜駅の前にある高浜市いきいき広場で行われた鬼瓦組合と高浜市のコラボ関係者との集まりから始まる。その始まりの段階で、由尋は他の組合員である鬼師たちとは違う反応を取ったのである。

みんなが、いろいろ、アニメ知らなかったりする方も多いので、「コラボかあー」みたいな感じだったんですけど、私としては（鬼滅の刃は）知ってましたし、SNSとかでもすごい人気があって、いろんな話題に上がってたんで、「これは絶対にやるしかない」という事で、父にも、母にも、「失敗しても、私の責任で良いから、絶対

にやろう」って言いました。

この短い言葉一つを採っても、由尋がアニメとのコラボを元々想定し、希求していたことが伝わって来る。「鬼滅の刃とのコラボ」の話が組合で出た時は由尋としては正に夢が現実化した事態が起きたことになる。しかし、夢想だにしなかったことが、いきなり降って湧いたわけではなく、むしろ逆の状態であった。由尋はその様子をさらに詳しく述べている。

昔からもの作りが好きで、色んなものを作ったりとか、あと、アニメが好きなので、アニメの元の絵を見ながら、同じように絵を描いたりというように、すごく好きで、普通だと皆さんある程度の年齢になると、アニメとかから離れちゃうんですけど……。私はずっとあまり友達との交流っというものもなく……。なのでアニメの方はずっとのめって行ったっていうか、入って行ったんですけど……。

それで、やっぱりオタクになっていって、そのなっていく中で、このアニメっていう反響がどんどん盛り上がって行ってるので、そこと瓦がコラボできれば、瓦をアニメが好きな世代に広げられると……。自分も作る時にアニメが好きなので、その思いを込めながら必死に作れるし、作っていても楽しいっていうのがあったので、アニメとコラボとか、ゲームとコラボとかすごくしたくて……。

で、今回、鬼滅のコラボの話を頂いた時に、「これだ！ 絶対これだ！」っていうので、ここでどれだけ出来るかでこの先アニメとかゲームでコラボ出来るかとか、産業がどれだけ発展して行ける足掛かりに出来るかというのが決まって来ると思ったので、それで、ま、あの、「どうしても、これはやらないといけない」、「私がやらなきゃいけない事なんじゃないだろうか」という思いがありました。

高浜市と鬼瓦組合からの「鬼滅の刃とのコラボ」についての説明会が終わって解散する時には、由尋は迷いなく、その場で参加の意向を伝えていたのであった。

もう、その場で、市役所の方とか、組合の方に、「どうしますか。また次のお返事いただけるまで待ちますね」っていう感じだったんですけど……。帰りには、もう、「私、絶対やりますから」って（笑）……。言ってる（笑）。

他の人たちがやらなくて、人数が少なかったら、その分、全部私が埋め合わせするぐらいでやるんで、「絶対にやらせて下さい」って言いました。

その時の由尋の反応とは対照的な組合員たちがその場には多くいた。その様子は由尋の言葉が伝えている。

他の人たちはやっぱりアニメっていうのが、どれだけ人気ってのが分かんないですし、その、今までやって来てるお仕事を大事にやって来てるので、「これをやるべきかどうか」っていう事をすごく皆さん悩んで見えて、「どうかな」っていうんで、「一回、うちに持ち帰って、家族とか話したり」とか……。「一旦冷静になって考えてから」っていうのが皆さんの意見でした。

映見も由尋の話にさらに肉付けをして行った。つまり、鬼師としての仕事が片や在り、短期的で、急に持ち上がったコラボレーションで、しかも相手がこれまで取り組んだことがないアニメ産業だったこともあり、この話を受けるべきか、流すべきなのかの選択を迫られることになったのである。映見は次のように話した。

やっぱり、皆さん、自分のお仕事されてるんで、その仕事をほっといたりだとか、その仕事を疎かにしてまでやるべきかってことで、悩んでたと思うんですよ。

やっぱり、大事な仕事、主体の仕事っていうのを大事にしなければ、その仕事が無くなってしまえばこのコラボレーションが終わった後で、仕事が無いじゃいけないんで、「今の仕事が大事なんだよ」って方が多かったですね。

その中で、ちょっと、じゃ、「興味あるなあ」とか、「今なら、まだ手が空^すいてるから、ちょっとやろうかな」っていう方が、一緒にコラボされたかなって感じはあったんで。

鬼師自体、人数がたくさんいても、その中で携わった会社さんってのは、6軒とか、7軒とか……。

ここに来て、映見は参加した鬼板屋は6軒か7軒と話したのを聞いて、私自身が聞いていた軒数の10軒と大きく違っていたので、「えっ」と思い、映見に聞きなおしたのである。映見は次のように話すのであった。

10軒って、あったのかなあ？ ……上の、モニュメント（高浜市役所玄関前に陳列された）ですね。モニュメントは10軒ぐらい携わったと思います。普通、一軒に付

き、二つずつモニュメント受け持つんですけど、何しろ、うちの娘がこんな状態なんで (笑)、「じゃ、皆さん、やられないなら、私、三個やります」っていう感じで、うちだけ三個もやらせてもらいました。

私はモニュメントを作った鬼板屋に参加した鬼板屋と見なしていた。しかし、映見からすると、コラボグッズを作り、体験コラボをも実行した鬼板屋を、正式なコラボ参加者だと思っているのであった。コラボに参加した鬼板屋にモニュメント制作だけの参加と、それに合わせて、コラボグッズも作り、体験コラボをも行った鬼板屋もあったのだ。つまり、それほど「鬼滅の刃とのコラボ」は鬼板屋にとっては未知数なイベントであり、かなりのリスクが生じる事業として立ちはだかったことになる。

では、直ぐに参加の意向を即答できた YUHIRO は何が他の鬼板屋と違っていたのだろうか。それについては映見が語っている。つまり、YUHIRO は独立した鬼板屋ではなく、(株) 伊達屋の一部門 (手作り鬼瓦を制作する) であることに尽きる (図 8)。

私たちは本当に幹があって、この会社 (伊達屋) っていうのは、主人が守っていてくれるからこそ、自分たちが他の事をやっても、あの、ちゃんと成り立つんですよね。だから、仕事っていうのは、別にもし、私たちの手が空いてれば、あの一、儲けが出ない



図 8 (株) 伊達屋と YUHIRO : 伊達利之 (左)、伊達由尋 (中央)、伊達映見 (右)
(株) 伊達屋事務所にて

というか、……揺らぐことがないんで、ここに携われたと思います。

そして、この（株）伊達屋の存在以前に、即答できた理由が、「鬼滅の刃と鬼師のコラボレーション」以前に、由尋が、もともと持っていた鬼師とアニメとのコラボがもたらす「瓦が若者の間に広がる未来へのイメージ」の存在があった。それ故に、「鬼滅の刃とのコラボ」のイメージがぴったりと由尋が心に抱いていたイメージと重なり合ったのである。由尋から飛び出して来た言葉が、「絶対にやらせて下さい」であった。

鬼滅の刃とのコラボ II

ここでは、由尋と「鬼滅の刃」との関わり合いについて見て行きたい。YUHIRO I で紹介したように、「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションで、YUHIRO が他の参加した鬼板屋と比べて突出した違いを見せたのは、YUHIRO が持つ、鬼滅の刃に対するオタク度の異常な高さであった。この YUHIRO の抜きでたオタク性が「鬼滅の刃とのコラボ」に対するあらゆる局面へ波及しているのであった。そのオタク性がいかに生まれて来たのか、そしてそれはどういったものなのか、について考えてみたい。まずは、由尋と鬼滅の刃との出会いから見てみる。由尋は次のように述べている。

鬼滅の刃を本格的に単行本とかを揃え出したのが、……、一番、最初とかは、ジャンプとか買ってなかったんで、知らなくて、ネットとかで……。

私、アニメが好きで、コスプレも趣味だったので、コスプレをされる方の、そのコスプレとか、その人が次に読みたいアニメみたいな感じで……、漫画みたいな感じで紹介してたりしてたのを見て、ちょっと興味があって、見てたら嵌まっていた……、という形なので……。

最初から、こう、一巻とか、ジャンプの頃から追いかけてるって程ではないんですけど、五巻ぐらいから、ドンと揃え出して、「面白いから、これは読んで行こう」って言って、読み始めたんですけど……。

由尋は「面白いから、これは読んで行こう」の、その「面白さ」について話してくれた。それはある意味、鬼談議に発展しており、由尋が抱く、鬼瓦に対する「面白さ」と重なって行くのである。

やっぱり、その、何か、キャラクターそれぞれ一人一人に凄い、何て言うんでしょ、眼を向けてるというか。

今までだと、主人公が主体になって、ずーっと進んで行くという話が多かったと思うんですけど、これに（鬼滅の刃）関しては、「一人一人のキャラクターがすごく主人公みたいに熱く語られる」というのと、逆に、「敵側の人たちが、どうしてそういう風になってしまったのかというところまで語られる」ので、それがすごく深くて……。

今の時代とかだと、この人だけが悪いんじゃないで、この人、今、悪いって思われているけど、こっちの人の意見としては、どうなんだと考えさせられるような漫画だったというので、すごく嵌まっていたというか、のめり込んで行ったというのがあります。

今までの一方的な、何て言うんでしょ、悪と善じゃなくて、こっちはこっちで善なんだけど、なんでそうってしまったのかと考えると、こっちの人には、こっちの人の理由があるし、こっちの人にはこっちの人の理由があるから、こう対立してしまったんだのかなというまで凄く語られるので、それがすごく心を熱くするというか、どんどん入って行ってしまうというのがあると思います。

聞いていた映見が由尋の話を鬼瓦に被せて行き、「鬼滅の刃」と「鬼」、「鬼瓦」と「鬼」の二項を「鬼」を共通項にして、「鬼滅の刃」と「鬼」と「鬼瓦」の三角関係へと組み替えることにより、「鬼」を頂点として、「鬼滅の刃」と「鬼瓦」がここに相まみえることになる。

鬼瓦っていうのが、皆さん、鬼イコール人間の敵っていうイメージだと思うんですよ。多分、鬼滅の刃の中でもそういう捉え方をしてる部分もあるんですけど、鬼瓦ってのは、人間を守るために屋根に載って守ってしてくれる。だから、鬼瓦は敵ではなく、実は人間の味方だったり、人間に近い存在だったりっていうのが鬼瓦なんですけど……。

それを何か、アニメの中でちゃんと訴えてくれているというんですかね。「鬼はなぜ、こういう風になってしまったのかというところをちゃんと言ってくれる」ってところが、私たちとしても、「鬼瓦のね、こちらが言いたいことも、何か、アニメの中で

語ってくれてるんじゃないか」っていうところがあります。

由尋の言葉も、映見の言葉も、「鬼滅の刃」と「鬼瓦」の間に「鬼」を介（解）して親和性があることを語っている。そして、語っている二人が鬼師なのである。一方の「鬼滅の刃」の鬼師に相当する者が、鬼滅の「刃」（日輪刀）で鬼と対峙する各キャラクター（鬼殺隊の面々）となり、ここで、鬼師と「鬼滅の刃」のキャラクターたちが重なり合っ
て来るのである。そして、鬼師が「鬼滅の刃」のオタクとなると、鬼師が作る鬼滅の刃のキャラクターへの思い入れが異常な域を超える事態へと発展する。それが YUHIRO の場合、名場面プレートとして現前化したと言える。

次号へ続く。